

日本漢音の軽声減少について

漢音の国語化の側面

佐々木 勇

一、問題の所在

現在、日本語の中に占める漢語の存在は大きく、われわれは、漢語・和語の区別の意識も希薄なまま使用している。また、漢字の音は、呉音・漢音などを通常わけず、音形・アクセントともに、完全に日本語の体系に組み込んでいる。しかし、かつては、それが中国語音であり、伝来の時期が異なる呉音・漢音などが区別されて使用されていたことは周知のところである。

漢字音の声調についても、かつては、呉音と漢音とは異なる点があった。その一つとして、呉音には院政時代に声調変化（調値変化）が見られるが、漢音には見られないことが説かれている。⁽¹⁾

だが、現状をみれば、漢音声調についても、何らかの変化があらわれる時期があるはずである。

実際、漢音を加点した古訓点資料の声点を整理すると、同一漢字に何種類かの声調を示す加点が見られることが多い。そして、

日本漢音の軽声減少について

時代が降るとともに中国中古音とのずれが大きくなること、つとに指摘されている。⁽²⁾特に顕著な点として、次の二点が挙げられている。

1. 十一世紀後半から平声軽が平声に発音される傾向が見られ、十四世紀初頭には、両声は全く混同した。

2. 十一世紀後半から入声軽が入声に発音される傾向が見られ、十二世紀中葉には、両声は全く混同した。

しかし、この変化の原因は、かならずしも明らかではなかった。そのような中で、筆者はかつて、岩崎本『蒙求』⁽³⁾について調査し、鎌倉時代には、日本漢音にも和語・日本呉音と同様な理由による声調変化が見られることを左の論文で指摘した。

日本漢音に於ける声調変化

——岩崎文庫本『蒙求』を中心に——

本稿は、日本漢音の声調の中で揺れの最も大きい軽声について、

その実態を見ると共に、減少の原因を考えようとするものである。

一、調査対象資料

問題の性質上、対象資料として訓点資料が選ばれる。前引の拙稿で声調変化が見られた鎌倉時代の資料を調査することが有効であろう。また、和語アクセントの影響を考えるならば、漢字音による直読のアクセントを記した『蒙求』などではなく、漢文を訓読した資料に変化が顕著である可能性が高い。さらに、漢音を問題として取り上げるために、呉音の混入の少ない資料が良い。よって、比較的純粋な漢音を伝えるとされている漢籍訓点資料が選ばれる。

右の理由から、金沢文庫本『群書治要』巻一―巻十（巻四欠）一二五三―一二五七年点を調査対象資料として選ぶ¹⁾。

三、『廣韻』声調・声母の清濁との対応関係

まず、対象資料中の声点加例全三〇五六例を『廣韻』の体系と比較すると、表1のようになる。

本資料は、日本漢音の中心的な声調体系である六声体系で加例されている。その声点から知られる声調は、『廣韻』声調に基本的には一致している。だが、日本漢音の六声体系と中国中古音の

声調清濁の対応の原則に、合わない点がある。その大きな相違点は、次の二点である。

1. 『廣韻』平声清・次清が平声軽とならずに平声重となる例の方が多い。

2. 入声の軽重の別が不分明である。入声軽になるのが原則の『廣韻』清・次清・次濁字も入声重となる例の方が多い。

いずれも、軽声が減少し、軽声と重声との区別がなくなっていく傾向である。

これは、同時代の漢籍の実態と同傾向である⁶⁾。

具体的には、次のような例である（△、▽内は、所在）。

- 1. 『廣韻』平声清 施^平は △九²³▽
- 『廣韻』平声次清 差^平の △八¹¹⁴▽
- 2. 『廣韻』入声清 塞^入 △八¹⁰⁷▽
- 『廣韻』入声次清 畜^入也 △五⁴⁴▽
- 『廣韻』入声次濁 獄^入濁を △十⁵⁰⁰▽

四、軽声減少の原因分析

軽声で発音されることが前代の原則でありながら、本資料で重声となっている例には、何か共通性は見られないものであるか。以下にその検討を行い、軽声減少の要因を探りたい。

表 1

廣韻／点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	173 (279)	56 (86)	151 (244)	148 (248)	8 (12)	1 (2)	3 (3)		3 (4)		6 (7)	1 (1)				
平軽	95 (167)	17 (28)	21 (26)	10 (14)	3 (3)	3 (3)			2 (2)	1 (2)	1 (2)	1 (1)				
上	4 (4)		4 (5)	6 (6)	100 (189)	30 (45)	34 (48)	61 (91)	10 (11)	5 (7)	6 (8)	4 (6)				
去	6 (10)		5 (6)	4 (4)	14 (18)	9 (9)	37 (51)	13 (16)	179 (401)	40 (61)	84 (245)	80 (235)				
入軽	1 (1)												44 (63)	15 (20)	17 (27)	26 (53)
入	1 (1)	1 (1)											78 (126)	30 (43)	43 (53)	37 (58)

(上の数字は異なり字数、下の()内の数字は延べ例数である。空欄は、用例が無いことを示す。)

1・音節数の観点

漢字音は、一字一音節の中国語アクセントに依っていたため、当初は、漢字音の仮名表記を日本語として発音した場合の音節数に拘わらず、アクセントは、中国語声調を反映していた。ところが、時代が降ると共に、漢字音が日本語音化されていく。それによって、日本呉音のアクセントに音節数による差異が見られることが指摘されている⁷⁾。

そこで、本資料の加例を一音節・二音節に分け、声調ごとに例を数えてみる。

ただし、ここでは、「ア」「ジ」などを一音節、「カン」「リョウ」などを二音節とした。なお、入声については、鎌倉時代の漢字音では、唇内入声・喉内入声（泣キフ・特トク など）は開音節化し、舌内入声（物ブツ など）は開音節化せず（「」の閉促性を保っていたとする説が有力である⁸⁾。よって、唇内・喉内入声字を二音節、舌内入声字を一音節として処理した。

結果の数を表に示したものが、表2である。

表 2

	一音節	二音節	計
平	245	641	886
平軽	25	223	248
上	141	279	420
去	297	759	1056
入軽	36	128	164
入	78	204	282
計	822	2234	3056

表2では、平声軽に一音節字が少ないことが注目される。ただし、これは、その声調を示すはずの漢字への加點例の偏りを反映したものかもしれない。そこで、先の表1に、音節数の観点をに入れて整理し直すと、表3が得られる(上声・去声の例は省略した)。「廣韻」の平声清・次清字は、日本漢音において平声軽となるのが原則であった。本資料では、その原則から外れ、平声になる例が多いことを先に見た。この傾向は、一音節字・二音節字ともに見られる。しかし、本資料で、かつての原則通りに平声軽にとどまった例は、圧倒的に二音節字に集中している。また、平声濁・次濁字で平声軽が加點された例も二音節字に偏っている。これは、平声軽という曲調(下降調)アクセントを表現するには、二音節分の長さが必要であったためであろう。

語の音節数が意味を持つことになる。と同時に、舌内入声が開音節化せず〔ㄷ〕の閉促性を保っていたとする通説を裏付けることになる。⁽¹⁰⁾

2. 語頭・語頭以外の観點

現代日本語では、同一の漢字の音であっても、その漢字音の語中の位置によって、アクセントが異なることがある。たとえば、ガイコク(外国) ○●●—コクガイ(国外) ○●○○となり、「ガイ」「コク」のアクセントは、変化する。時代を遡っても、和語については、『類聚名義抄』の去声点が一拍目に集中するという金田一春彦の指摘がある。⁽¹¹⁾ また、呉音でも、一音節字の去声が語頭に残存することが指摘されている。⁽¹²⁾

そこで、本資料中の声点加點例の全体が、語頭・語頭以外でどのような分布を示すのかをみる。

全三〇五六例を語頭・語頭以外の観點で分類し、その例数を示すと表4のようになる。⁽¹³⁾

本資料における声点加點は、語頭の例と語頭以外の例が、ほぼ三対一の割合である。その全体の割合と比べてみた場合に、次の点が注目される。

- ①平声軽の例が語頭に多い。
- ②入声軽の例が語頭に少ない。

日本漢音の轻声減少について

表 3

声点	廣韻	平 声				入 声			
		清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	一	70	30	61	74				
	二	209	56	183	174				
平軽	一	14	2	4	3				
	二	153	26	22	11				
入軽	一					23	3	4	6
	二	1				40	17	23	47
入	一					35	13	12	17
	二	1	1			92	30	40	41

(一は一音節字、二は二音節字の延べ例数を示す。)

また、入声軽については、表2では特に傾向が見いだせないが、表3で、「廣韻」次濁字が入声軽になる例が、二音節字に集まることが指摘できる。これは、日本漢音で有声音が始まる次濁字の始めの音が低くなり、一音節内では高入破音の入声軽の発音が難しいためであると解釈できるであろうか。⁽⁹⁾

もし、この解釈が許されれば、入声軽の出現についても、日本

表 4

	語頭	語中尾	計
平	659	227	886
平軽	207	41	248
上	295	125	420
去	807	250	1057
入軽	109	54	163
入	205	77	282
計	2282	774	3056

これが見せかけの数か否かを確認するために、ここでも表1に語頭・それ以外の観點を入れて整理し直すと、表5となる(上声・去声の例は省略した)。

表5によって、右の①②について順に検討する。

①平声軽の例が語頭に多い

日本漢音の原則として、平声軽になるのは、「廣韻」平声清・次清字であった。表5によると、本資料の声点加點例のうち「廣韻」平声清・次清字は、四五六例が語頭、一一〇例が語頭以外であって、ほぼ四対一の割合で語頭に加點が集中している。

これと比べた場合、先の平声軽全体の語頭対語頭以外の二〇七対四一、平声軽加點例の内平声清・次清字の一六二対三三は、語頭にやや多いといえる。また、例外的に平声軽となる平声次濁

表 5

声点	廣韻	平 声				入 声			
		清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	頭	220	72	185	161				
	中	62	14	59	86				
平輕	頭	139	23	21	13				
	中	28	5	5	1				
入輕	頭					43	12	15	39
	中	1				20	8	12	13
入	頭	1	1			90	29	42	43
	中					37	14	11	15

(頭は語頭、中は語頭以外の延べ例数を示す。)

字の例も、語頭への加點例がさほど多くない中で、語頭に集中していることは注目される。具体的には、次のような例である。¹⁵⁾

能(平輕を)〈170・1400〉農(平輕の)〈九188〉闇(平輕エン)没〈六421〉

以上、判然としないが、「平声輕の例が語頭に多い」は、否定できない。

②入声輕の例が語頭に少ない

算入しない。これは、同一字でも出現箇所によって、声調が異なるためである。

まず、平声と平声輕から見る。

平声点の上接字・下接字の声調

点	上接	下接
平	74	71
平輕	13	11
上	12	21
去	6	43
入輕	2	5
入	14	13
計	121	164

(平声点加點例のうち上接字に平声が加點された例が七四例、同じく下接字に平声点加點された例が七一例の意味である。以下、同じ。)

平声輕点の上接字・下接字の声調

点	上接	下接
平	11	18
平輕	4	3
上	2	6
去	2	8
入輕	2	1
入	0	10
計	21	46

平声点は、上接・下接ともに平声点の例が多い。平声点は、全声点加點例(三〇五六)のうちの約二九%を占めるが、ここでは、

日本漢音の軽声減少について

日本漢音で入声輕になるのは、原則として『廣韻』入声清・次清・次濁字であった。表5によると、本資料の声点加點例のうち『廣韻』入声清・次清・次濁字は、二五六例が語頭、一〇七例が語頭以外であって、ほぼ五対二の割合で語頭に加點が多い。

これに対して、本資料の入声輕加點例は、語頭と語頭以外が一〇九対五四であった。入声輕は、語頭よりも語頭以外で出現する割合が高いといえる。具体的には、次のような例である。

逆悪(入輕)〈八67〉庶績(入輕)〈二106〉刑殺(入輕)〈八152〉

『廣韻』入声濁字が、語頭では入声輕対入声が一五対四二と入声が多いにもかかわらず、語頭以外ではほぼ同数であることもこれを補強する。

3. 上下の字の声調の影響の観点

右で、語頭とそれ以外とで、輕声の出現の仕方にわずかながら差が見られた。その理由の一つとして考えられるのが、直上字・直下字の声調の影響であろう。この観点によって、『妙法蓮華經』音読(吳音)中に出現する輕声の出現理由が説明されている。¹⁶⁾

そこで、本資料の平声・平声輕・入声・入声輕加點例の上下字の声調をしてみる。上下の字の声調の認定は、本資料の当該例における加點例に依る。その用例に声点が加點されていない場合は、

五〇%程度にまでなっている。もう一方の平声輕点も、上接・下接ともに平声点の例が多い。

また、平声点には去声点が下接する例が上接する例と比べ多く、平声輕点には、入声点の下接する例が上接する例と比べ多い。

右の事実をアクセントの高低でしめすと次のような型が多いことになる(平声を○、平声輕●、去声○、入声△とする)。

- ① ○○+○○
- ② ○○+●●
- ③ ●●+○○
- ④ ○○+●●
- ⑤ ●●+△△

①の型は、『廣韻』平声清・次清字が、上または下に平声字が接した場合に平声になっている例を含む(平声清・五一例、平声次清・一四例)。上・下の平らかなアクセントの影響で全平のアクセントになったと解釈できる。②③の型はこれに反する。しかし、②③に属する例の多くは、『廣韻』平声清・次清字であり(平声清・一九例、平声次清・五例)、上・下の平声に影響されず本来の日本漢音声調をとどめた例と見られる。

④でも『廣韻』平声清・次清字が平声になっている(平声清・一六例、平声次清・八例)。これは、●○○●という中低型アクセントを避けるための現象と解釈できる。⑤が多いのは、平声輕の下降調の後、低入破音の入声が表現しやすいためであろう。次に入声と入声輕とを見る。

入声点の上接字・下接字の声調

点	上接	下接
平	14	13
平軽	9	0
上	2	4
去	4	8
入軽	1	2
入	4	5
計	34	32

入声軽点の上接字・下接字の声調

点	上接	下接
平	6	3
平軽	2	2
上	4	2
去	3	2
入軽	2	2
入	2	1
計	19	12

入声点は、上接・下接ともに平声点の例が多い。これは、平声加点例と同様である。また、平声軽点が上接する例が多いことも指摘できる。入声軽点は、例数が少なく、傾向は不明である。

これをアクセントの高低で示すと次の型が多いことになる。

- ①○○+○△ ②○△+○○ ③●○+○△

①②の型では、『廣韻』入声清・次清・次濁字も、上または下に平声字がつく場合には入声になっている(入声清一例、入声次清五例、入声次濁五例)。上・下の平らなアクセントの影響で

低入破音になったと解釈できる。

③は、●○●▲という中低型アクセントを避け、●○○○△になった現象であろう。

以上、本稿の語認定で、上接字・下接字を持つ例は、声点加点例の約半数(二五二六例)ではないが、右の傾向が見いだされたことは、重要である。

五、まとめ

これまでの検討によって、次の点が判明した。

金沢文庫本『群書治要』(巻第一―巻第十)一二五三―一二五七年点において、

1. 軽声の出現は、日本語の音節数に影響される。
2. 軽声の出現は、語頭か否かに影響される。
3. 上接字・下接字の声調の影響を受けたと見られる例が存する。

これらのことから、遅くとも十三世紀中頃には、日本漢音の声調の分析にも、日本語の音節数・語の観点を導入しなければならぬことがわかった。単字を『廣韻』の体系にあてはめる従来の方法だけでは、日本漢音声調の研究は不十分なのである。

また、これらが日本漢音の国語化の現われである点も見逃せな

い。なぜならば、日本語の音節数によって差が出る事象が、中国語の声調変化の反映とは考えられないからである。

ただし、声調全体を見れば、本資料は、いまだ大部分が漢音の体系に一致している。和語ではほぼ失われ呉音には本来無かった平声軽と、和語・呉音ともに元来存しない入声軽について、漢音が和語・呉音のアクセントの影響を蒙ったということである。

〈注〉

- (1) 沼本克明「毘富羅声の機能」(『国語学』第八四集)。
- (2) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院、一九八二年)四九頁。
- (3) 柏谷嘉弘「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」(『国語学』第六一集)。
- (4) 鎌倉時代の漢籍訓読資料の中からこれを選択した理由は、次の三点である。①加点年代が明らかでないこと。②清原教隆ひとりによる加点であること。③まとまった分量が伝存していること。なお、調査は、『群書治要』(一)(古典研究会叢書漢籍之部15、汲古書院)による。また、本資料の訓点については、小林芳規「金沢文庫本群書治要の訓点」(『群書治要』七)「解題(同右)」を参照。
- (5) 沼本克明『日本漢字音の歴史』(東京堂出版、一九八六年)一三〇頁など参照。
- (6) 注3文献、参照。
- (7) 注1文献、参照。
- (8) 橋本進吉「文禄元年本草版吉利支丹教義の研究」(『東洋文庫』一九二八年一月)小林芳規「鎌倉時代語史料としての草橋本教行信証古点

- (9) いわゆる濁声点(一般的に、平声軽・入声軽に少ないという事実もこれを裏付けるのではなからうか(佐々木勇「声点「△」の機能――『辨正論』保安四年点について)――)「かのみ」第三二号、一九九四年三月参照。
- (10) ただし、舌内入声字の中で開音節化していたものの存在を否定するものではない。親鸞の資料から開音節化していたことが知られる「一」[七]「日」「八」への声点加点例は、本資料には無い。
- (11) 秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典 第二版』(三省堂、一九八一年四月)による。
- (12) 『国語アクセントの史的研究(原理と方法)』四五・四六頁。
- (13) 佐々木勇「呉音一音節去声字の上声化の過程」(『鎌倉時代語研究』第十輯、一九八七年五月)。
- (14) 語頭の認定は、加点された訓点に依る訓読に基づく。具体例は、『古典籍索引叢書⑩』宮内庁書陵部蔵本群書治要群書類索引(汲古書院、近刊)に依る。
- (15) ただし、これらの漢字には、語頭以外での加点例がない。また、語頭で平声に加点された例もある。
- (16) 沼本克明「法華経呉音読に於ける軽声について」(信州大学人文科学論集)第八号、一九七四年三月)のち、改稿して、注2著書に所収。

比治山大学助教授